

平成 30 年 4 月 5 日

外務省国際協力局  
民間援助連携室長 殿

(団体名) 認定 NPO 法人 IVY  
代表理事 枝松直樹

### NGO 相談員による出張サービス実施報告

NGO 相談員による出張サービスを下記のとおり企画し、提案いたしますので御承認願います。

#### 記

1. 企画名: 難民を知るワークショップ ～もし、あなたが故郷を追われたら～  
【形態: 相談対応サービス・講演・セミナー・その他(ワークショップ)】
2. 出張者氏名: 阿部真理子
3. 依頼元／主催等団体名: 独立行政法人国際協力機構東北支部、認定 NPO 法人 IVY 共催: 公益財団法人岩手県国際交流協会
4. 実施予定日時: 平成 30 年 3 月 24 日(土) 13 時 30 分～16 時 00 分
5. 実施場所: いわて県民情報交流センター(アイーナ)6 階団体活動室 1  
岩手県盛岡市盛岡駅西通 1-7-1
6. 実施の概要

参加者: 高校生、一般市民 計 37 名

JICA 岩手デスクより依頼があり実施。岩手日報に事前告知が載ったこと、岩手県国際交流協会から広報の協力をいただいたこともあり、37 名の参加者となった。JICA のエッセイコンテストや国際協力実体験プログラムに参加した、国際協力に関心の高い高校生が半分を占めた。

当日は、弊団体のイラク・クルド自治区におけるシリア難民・イラク国内避難民支援(N 連、JPF 事業)を元に制作した「難民を知るワークショップ」を行うとともに、弊団体の難民支援の事業背景、事業内容等について紹介を行い、日本の NGO が行う国際協力活動、ODA について、市民の理解促進を図った。

#### ＜参加者のアンケートから＞

- ・ 難民の人たちは、人としての生活条件が整っていないこと、問題の解決を自分たちで出来ないこと、その中で衣食住・医療衛生面における基本的人権が守られることが必要と感じました。
- ・ 難民や国際協力について興味はあったが、知識がなかったり直接関わられるような機会がなかったが、今回ワークショップを通じて、いろいろ知ることができた。
- ・ 難民の人たちに対して、まるで自分たちと違う人間のように扱ってはいけなと強く感じました。
- ・ いろいろな世代の人が一緒になって話し合ったことが印象的だった。
- ・ 海外からの支援は必要だと思った。

＜所感＞

今回の出張サービスで、東北6県全県での出張サービスは完了した。岩手県内での出張に関しては、なかなかまとまらず、最後 JICA の岩手デスクとの共催という形で実現出来た。1 月には出張申請の承認が下りていたこともあり、広報の時間を十分に取れたこと、岩手デスクが関係者に広く声をかけてくれたことが功を奏し、37 名の参加につながった。来年度も早めに申請を行い、参加者増に努めていく。

以上



全体の様子



ロールプレイの原稿を読んで、難民キャンプでの暮らしを知る

2018 年 3 月 16 日

## NGO 相談員による出張サービス実施報告

特定非営利活動法人 難民を助ける会

企画名： 函館白百合学園中学高等学校での国際理解教育授業への講師派遣  
開催日時：2018 年 3 月 14 日（木）①8 時 50 分～9 時 40 分、②9 時 50 分～10 時 40 分  
主催者： 函館白百合学園中学高等学校（担当：三觥慈子教諭）  
場 所： 函館白百合学園中学高等学校（北海道函館市山の手 2-6-3）  
出張者： （正・副・その他）特定非営利活動法人難民を助ける会 加藤玲奈  
参加者数：①中学生 53 名、高校生 234 名、教職員 50 名 ②中学生 53 名

### 実施内容：

函館白百合学園中学高等学校から、難民問題や国際協力についての講師派遣の依頼を受け実施した。朝礼のあとそのまま行われた 1 時限目（上記①のコマ）は、高校 3 年生を除く全校生徒と教職員計 337 名を対象に「国際協力とは何か」について紹介したうえで、日本政府は ODA を通じて国際協力を実施している重要なアクターであること、AAR のような国際協力 NGO は一般寄付に加え日本政府からの助成金により、様々な支援活動の実施が可能になっていることなどを説明した。また NGO の行う難民支援活動に理解を促すため、当会が行うバングラデシュでのミャンマー避難民支援活動を例に説明した。最後に国際協力の世界で働くために今、また将来経験を積んでおくことについても触れた。2 時限目（上記②のコマ）は中学生のみ 53 名を対象として、難民や難民支援活動について説明した。「難民を一番多く出している国はどこか」との質問に対しては「シリア」と正答を挙げる生徒が多数だったのに対し、「難民を一番受け入れている国はどこか」との質問には米国やカナダ等の先進国を挙げる生徒が多く、トルコ、パキスタン等の近隣諸国が最も多くの難民を受け入れているという事実を知ると一様に驚いた様子であった。また、クイズ形式にしたり難民になった場合に困ることをグループに分かれて話し合ってもらったりするなどして、座学で講義を聞くばかりではなく自ら考えることができるよう配慮した。また、シリア難民を例に、現場の写真や映像を交えて、一言で難民といっても各々異なる状況に置かれていること、必要とされる支援も様々であることを説明した。最後に、こうした困難な立場にある人たちのため学び続けることの大切さを強調するとともに、中学生でもできる国際協力について紹介した。生徒か

らは「写真や動画で難民の方々の実際の声を聞くことができたので、難民の窮状についてとても身近に感じられた」、「難民の現状がよくわかった。関心を持ってニュースを見るようにしたい」、「講演を聴いて、今、私にできることは何かないかなと考えた」、「今自分が住んでいる地域でできることもちゃんとある。現地の情報を知ることそのひとつ。小さなことからこつこつと始めていきたい」といった感想が寄せられた。

所感：

函館白百合学園中学高等学校は貧困や南北格差に関心を持ち、毎年、クリスマス募金や同校福祉局が実施しているクリスマスカレンダー市の収益を非営利団体に寄付している。しかし日常的に、国際協力や世界情勢についての授業を行う機会はないとのことだった。今回の講義に対し、担当教諭からは「高校の社会科はこうして NGO や NPO の人たちを招いて生徒たちに社会への関心を持ってもらうような授業が必要になるといわれているが、その先駆けとなったと思う」との評価をいただいた。生徒からその場で質問は出なかったものの、後に寄せられた感想文からは国際協力や世界の国々の状況への関心、支援活動への理解が深まったことが読み取れ、同校で講義できたことは大変意義深かった。



1 時限目の講義の様子



2 時限目の講義の様子



グループで「難民になったら困ると思うこと」を話しあい、発表してもらった

2018 年 3 月 17 日

## NGO 相談員による出張サービス実施報告

特定非営利活動法人 難民を助ける会

企画名：特定非営利活動法人いわて翼の会主催イベントへの講師派遣

開催日時：2018 年 3 月 17 日（土） 13 時 30 分～15 時

主催者：特定非営利活動法人 いわて翼の会

場 所：いわて県民情報交流センター（アイーナ）（岩手県盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7 番 1 号）

出張者：（正・副・その他）特定非営利活動法人難民を助ける会 櫻井 佑樹

参加者数：約 25 名

### 実施内容：

特定非営利活動法人いわて翼の会（理事長：山中彰子）の設立 20 周年記念事業の一環の講演会に招請された。いわて翼の会は、かつて岩手県から海外派遣された県民が設立した団体である。「国際協力」、「地域活性化」、「男女共同参画」などを目的に活動し、宿泊研修やバザーなどを開催して、社会の課題を広く一般の人たちへ伝える活動を行っている。

今回は、依頼に基づき、同会の会員および岩手県の一般市民を対象として、当会の活動の中心である途上国での「難民支援」、「地雷・不発弾対策」および「障がい者支援」を例に、NGO の取り組む国際協力について講演した。また、活動写真のパネル展示も実施し、より具体的に現場の様子の理解が深められるよう努めた。

質疑の時間には、海外での日本人に対する印象について問われ、出張者の過去 3 ヶ国での駐在経験では、好意的であり第二次世界大戦後からの復興について評価する声が多い印象であることを伝えた。

### 所感：

いわて翼の会の設立経緯から、参加者は皆国際協力や社会の課題に関心が高い印象であった。当会の活動事例を通して、日本の NGO が行う国際協力の取り組みについて理解を促すことができた。これを契機に、さらに国際協力の学びや実践を進められることを期待している。



## NGO相談員による出張サービス実施報告書

1. 企画名: カンボジア農村の今 ～国際協力の現場からの視点、新潟の山村からの視点～

【形態: 相談対応サービス・講演・セミナー・その他( )】

2. 実施者: 長谷部 貴俊 (日本国際ボランティアセンター 事務局長)

3. 実施日時: 平成30年3月7日(水) 14時00分～17時00分

4. 実施場所: 吉川地区公民館 川谷分館 (新潟県上越市吉川区川谷3351)

5. 参加者: 約25名

6. 実施内容:

①概要: 本企画の主催者である新潟県上越市の農村地域にある市民団体「川谷もよりの将来をみんなで考える会」は、地元の農林地などの資源活用や交流などを通じて地域の活性化に取り組む団体である。

当日は、まず主催者から地元の川谷地区における主催団体の取り組みと地域の課題についての説明があり、続けて長谷部から、カンボジアに関する一般状況や社会の変化について提示し、また当該地での当団体を含む日本による国際協力活動について紹介した。特に、今回の講師である長谷部はカンボジアにおける駐在経験もあり、また直近での当該地への出張もあったことから、体験談のみならず最新情報も含めて説得力のある内容となった。

②所感および効果: 参加者からは講演時間内にも多くの質問があり、また「カンボジアの状況について断片的な情報しか知らなかったので、実際に直接まとまって話を聞く機会となってよかった」「川谷を含む日本のそれぞれの地域が直面する課題にどう取り組むのかは依然として大きな関心事。カンボジアにおいても、JVCの活動地も近代化の過程で日本の地域とよく似た状況に直面していることがわかった。日本の取り組みが参考になることもあるかもしれない」などとの感想が寄せられた。こうしたことから、当企画が国際的課題への取り組みに関する理解を促進することができたと期待できる。

以上

## 7. 別添(写真)



今回の講義のなかでは、地元の川谷地区と当団体の活動地であるカンボジアの農村地域の両者における共通点についても参加者と議論することができた。これによって、カンボジアのことをより身近に感じられたと思われる。

## NGO相談員による出張サービス実施報告書

1. 企画名: 武力によらない平和づくり ～アフガニスタンにおける対話を通じた事例から～

【形態: 相談対応サービス・**講演**・セミナー・その他( )】

2. 実施者: 加藤 真希(日本国際ボランティアセンター アフガニスタン事業担当)

3. 実施日時: 平成30年3月18日(日) 14時00分～16時00分

4. 実施場所: 桐生市中央公民館(群馬県桐生市稲荷町1-4)

5. 参加者: 約20名

6. 実施内容:

①概要: 本企画の主催者である桐生「対話の会」は、質の高いコミュニケーションスキルの啓発活動をしている団体である。

当日は、実施者からアフガニスタンの文化背景や最近の現地状況、治安状況に関して、最新の情報も織り交ぜながら提示した。続いて、当団体の活動(特に対話を通しての紛争予防活動)を紹介した。特に、今回の主催者である桐生「対話の会」は、その関係者に対話によるコミュニケーションスキルに強い関心がある方が多いことから、当団体の活動である「対話を通しての紛争予防活動」を紹介することで、国際的な課題を身近に感じる機会とすることができた。

②所感および効果: 参加者からは講演時間内にも多くの質問があり、また「NGOの立場から現地の様子をつたえてくださり、自身が求めている答えを見出した」「遠い国の出来事については、現状を聞いても生活に追われて忘れてしまう、ということを再認識した。また、問題の当事者でないからこそその気づきも得られた」などとの感想が寄せられた。こうしたことから、当企画が国際的課題への取り組みに関する理解を促進することができたと期待できる。

以上

## 7. 別添(写真)



今回の講義では、初めて訪問する地域だったので、活動地の地域の状況そのものとともに、国際協力活動の全体像を伝えることに重点をおいた。

## NGO相談員による出張サービス実施報告書

1. 企画名: 当団体の支援者管理システム面などでのアドバイス

【形態: 相談対応サービス・講演・セミナー・その他(実務面アドバイス)】

2. 実施者: 細野 純也 (日本国際ボランティアセンター 事務局次長)

3. 実施日時: 平成30年3月24日(土) 15時00分～17時00分

4. 実施場所: クロスパルにいがた (新潟県新潟市中央区礎町通3-2086)

5. 参加者: 約15名

6. 実施内容:

①概要: 本企画の主催者である新潟国際ボランティアセンターは、新潟県で活動する国際協力団体である。当日の会場には、主催者事務局員ならびに他団体の関係者が参加されており、まずは参加者の方にグループに分かれてもらい、参加者自身の団体における支援者管理システムやその他のIT面での課題をグループ内で共有してもらい、次にそれに対して実施者が解説ならびにその場でアドバイスを行った。特に、今回の講師である細野は自団体のみならず前職でのシステムエンジニアとしての実務経験が長いことから、一般論的なアドバイスにとどまらず、実際の課題に対する改善につなげる視点からの構成とした。

②所感および効果: 参加者からは実施時間内にも多くの質問があり、「各自が課題と思う事項を共有することで、団体面での共通する課題が改めて浮かび上がった」「実際に改善できそうなアドバイス／アイデアを受けられたので、今後実施を検討したい」などとの感想が寄せられた。こうしたことから、当企画が参加者の運営能力の向上に一定程度寄与することができたと期待できる。

また、「IT面の課題解決」という視点から考えると、IT技術は国際協力団体の運営管理において重要な一側面を担っているにも関わらず、この分野に関する知見を持った人材がこの業界には慢性的に不足していると考えている。組織運営面の課題ととらえて、なにかしらの支援策があってもいいかもしれない。

以上

## 7. 別添(写真)



今回は、一方向の講演という形式を取らず、参加者の課題認識をグループごとに話し合ってもらい、それを先に提示してもらうことで、参加者の関心をよりピンポイントに把握し、それに対して適宜アドバイスをする形式をとった。

平成 30年 3月 8日

外務省国際協力局  
民間援助連携室長 殿

(団体名)公益財団法人PHD協会  
理事長 水野 雄二

相談員企画型出張サービス実施報告書

1. 企 画 名:「但馬農業高校での国際協力についての講演会及び交流」

※出張形態:講演

2. 出 張 者:前田千春((公財)PHD協会 職員)

3. 実 施 日:2018年3月5日(月)11:00~12:30

4. 実施場所:兵庫県立但馬農業高校 (兵庫県養父市八鹿町高柳300-1)

5. 対象者:但馬農業高校 1年生・2年生:約212名、教員:20名

6. 実施報告:

但馬農業高校 1~2 年生を対象に国際協力とアジア地域の農業及び農村についての講演を行った。本講演をするにあたって、但馬農業高校の担当教諭から「学生が農業の大切さについて理解できるような講演をしてほしい」、「国際協力の中の農業の重要性について話してほしい」との依頼があった。

そのため、講演では初め日本が関わる国際協力の中から、農業分野での活動する国際協力について説明した。そして、PHD 協会もその一翼として農村地域から研修生を招聘し、人材育成を通して農業分野での国際協力を行っていることを紹介した。

次に当会が招聘したネパール、インドネシア、ミャンマーからの研修生と一緒に、それぞれの村の状況について、また、村の課題を解決するために日本で実施した研修について、そして帰国後の行動計画についてを紹介した。

ネパールからの研修生は出身村の人たちが十分な知識のないまま農薬を徐々に使い始めていることに不安を感じたことから、自然環境を活かした有機農法と農薬の健康被害について日本で学び、帰国後は村の人たちと有機農業に取り組みたいという目標を発表した。小学校教諭の仕事をしているインドネシアからの研修生は、日本で子どもたちが主体的に取り組むおもしろい授業が教育には大切であると気づき、帰

国後はおもしろい授業の実践に取り組むことを語った。最後にミャンマーからの研修生は農薬や除草剤を使用しない有機農業の普及と、歯磨きの指導を通して村の人たちの健康を守っていく計画を発表した。

講演後、教諭からアジア地域の村人が地域のために勉強に励む様子が、生徒にとって地域貢献への刺激となったという感想をいただいた。また、生徒からは、アジアの農村や農業の現状について学ぶことができた、アジアの農村から日本が学ぶべき点もある、などの感想をいただいた。

## 7. 添付画像:別紙に当日の様子を2枚添付

### ① 講演会全体の様子



### ② NGO 相談員について説明している様子

